IS ~ XENO ~

セラフ零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS(XENOX)

【Nコード】

N2545Y

【作者名】

セラフ零

【あらすじ】

IS、インフィニットストラトス。

女性にのみ起動し、運用可能な兵器。

その運動性及び汎用性は他の兵器を圧倒し、最強という地位を確立させ男尊女卑の時代を一変させたものである。

だが、ISには未だに謎が多い。

そのコアの製造方法、特に何故女性にのみ起動が可能なのか。

その謎は未だに解明されていない。

そんな中、一人の男子がISを起動させた。

彼の名前は織斑一夏。

何故彼だけがISを起動させることが出来たのか。

何故女性に限定されて起動できるものが、男性である彼に起動出来たのか。

謎は深まるばかりである。

そしてたった一人の男子生徒としてIS学園に通う彼の前に突如として訪れる厄災。

それはヒトの形をした、ヒトでない存在。

訪れたのは異質。

そう、異質な機械であった

事実或いは虚実

正義、なんて聞き飽きた。

それが正しいなんて誰が決めた。

彼女たちは言った。

「最強の矛をも殴り飛ばす最強の盾であれ」

それが正義の味方か。

だが一方で彼らはこういう。

「力こそが正義だ」と。

彼らが行ってきたのは略奪と破壊、そして殺戮。それは自然界で当たり前に行われている事。

自身が生きる為に、他者を蹴落とす行為。

人間なんて位置づけてしまえば只の社会的動物。

社会的動物なのだ。

今は古くなったラジオを聴いていた時、人間は動物じゃない、なんて答える馬鹿がいた。

そのものが如何に幼かったとは言え、あまりに稚拙な回答だ。

所詮人間は動物なんだ。

何処まで行っても人間は生物に過ぎない。

たとえどれ程までに進化しても、だ。

故に、人間には過ぎた玩具なのだ。所詮、過ぎた玩具に過ぎない。

如何に美しく複製出来ても。

訪れる異質。(前書き)

ゼノギアスは完全な設定とか後付用の設定なんでほぼオリキャラで物語が進みますがごめんなさい。

あと、ほぼ関係ない設定になってるけど関連性があるのでゼノサーガもお話の中に入っちゃいますのであしからず。

だってすぎなんだもん。

ジン先生が。

訪れる異質。

訓練場、そこで今日もISの実習訓練が行われている。

IS、インフイニットストラトスはXX染色体を持つ人間、即ち女性にのみ扱う事の出来る強化外骨格、パワードスーツである。

不可解な事に、なぜ女性だけが起動し運用が可能なのか、その謎は未だに解決されていない。

だが、そんな女性のみ限定された機体を運用する唯一の男子、それがこのIS学園の黒一点である織斑一夏である。

本来、女性にのみ運用可能な機械をなぜ男性である彼が運用出来るのかは定かではない。

全く謎は深まるばかりである。

そしてこのIS学園に大きな騒動が一つ訪れる事になる。

それは、空から落ちてきた。

人間……落下物は人の形をしていた。

落ちてきた際の衝撃は非常に大きく、おおよそ生きているとは思えなかったが、それは確かにそこにたっていた。

生徒たちは一様に混乱、不安、警戒などの反応を見せる。

特に教師である女性二人の反応は早かった。

「返せ、返せ返せ返せ返せ」

落ちてきた人間は低くうなるような声でそう繰り返す。

落下の際に発生した砂埃が晴れてその姿が晒される。

「お前たちには過ぎた玩具だ」

姿を現したのは一人の少年。

髪は黒く、瞳は紅。顔つきは何処と無く中性的な感じがある。

彼はその一言だけを言い置くと、織斑一夏に対して急接近する。そうして少年の握り締めた拳を一振り。

咄嗟に防御姿勢を取る一夏だが、本来ならば生身の人間の拳など防御する必要もない。

幾分今は授業中、しかもISを起動させての訓練中だったのだ。

しかし少年の拳は機体ごと一夏の体を悠々と吹き飛ばす。

吹き飛ばされながらも体勢を立て直す一夏。

驚きが隠しきれない。

生身でISを吹き飛ばすなんて聞いた事がない。

一体何だと言うのだこの少年。

「アムニス、アニマ、その全てを返してもらおうぞ」

圧倒的覇気を纏って少年は言い放つ。

素手、既にしてその威力。

蒼い機体を装備した少女がビットを飛ばす。

数基のビットが少年を囲い、その銃口を向ける。

「大人しくなさい。生身の人間がISに敵う訳がありませんわ」

専用機、ブルーティアーズを扱うセシリアは少年に向かってそう言う。
う。

「エアッド、か。それも玩具だ。返してもらおう」

「黙りなさい！ 今すぐに両手を頭の後ろで組み、跪きなさい！

これは 「

言う間にエアッドが全て落とされる。

動いた風には見えなかった。その場で静止したままだった筈だとい
うのに。

何をしたのか、理解が追いつかない。

「警告ではありません、か？　ならば言葉にする前に行動するのだな小娘」

彼はセシリアを一瞥するとそのまま一夏へ足を進める。

零落白夜を構え、臨戦態勢をとる。

「抵抗は無意味と知れ」

そう言う彼の背後から鈴が青龍刀を振り下ろす。

音はあった。ただ、それ以上に速かった。

にも関わらず、少年はそれを片手で受け止め、あろう事かそれを握りつづす。

肩から砲撃を近距離で打ち込むと彼女は後退する。

あの距離で砲撃を受けて無傷で居られるわけもない。

そんな希望的な解釈が彼女たちの間を流れる。

尤も、そんなものはただの希望に過ぎない事を、彼女達は教えられない。

煙を振り払い中から現れたのは火傷すらない少年。彼は鈴に接近し掌底を加える。

咄嗟に距離をとる事に成功した彼女は、何とか回避に成功する。

最早、人間と認識する事を止め、出現した敵対対象として全力で排除行動にあたる。

そもそもIS相手に素手で圧倒するような奴を人間としてみるほうがおかしい。

眼鏡をかけた女性が砲撃を放つ。

それと同時に他のIS装備者たちも少年めがけて攻撃を開始する。

どうやら黒いスーツを着込んだ女性が指示を出しているらしい。

遠隔射撃を使うことによって、近寄らせない算段か。

だが、それでは所詮足止めにもなりはしない。
鼻で笑うように彼はひたすらに足を進める。嘲る様にひたすらに彼は歩を進めて行く。
目指す先は白式。
あれに一体何があるのか。あれは一体何なのか。
最強の兵器と名高いISの攻撃を涼風同然にあしらい、ただひたすらに歩を進める人間。

「はい。そこまでよー」

新しい女性の声が響くと同時に少年の周辺に機械が落ちてきて、彼の動きを制限した。

「何のつもりだ。元凶」

少年は現れた女性のほうをみて、そう言う。

其処にはうさ耳をつけたメイド服のような女性が一人だけいた。
篠ノ之束。

ISの開発者たる彼女が、現れたのだ。

「いつくんを殺されるわけには行かないのよー」

「殺す」

「怖い事いわないでえ。でもおそんな事出来ないよねえ」

「……出来ないことは無い」

「だけど出来ないわよね」

「俺が本気を出していない事を忘れていないか」

「本気を出せないのよね」

「異質な機械を使う事を俺が躊躇うとでも」

「思っているよん」

沈黙する少年。ISを生身で圧倒する少年がこうまで沈黙するとは。一体何なのだ。あの機械は。

「貴様がくみ上げた粗悪品はやはりガラクタだ」

「おおよそそのガラクタに圧倒されているのは何処の誰かなあ？」

再び沈黙。

全身を切り刻むような殺気だけは健在だ。

「よもやゾハルからの直接干渉を遮断する兵器を持ち出すとは」

「そんなことに気がつかないと思ったの？ 馬鹿なんだなー君は」

「エミュレーター風情を使った分際でよく言う」

「交渉しない？ 今ここで襲うのを止めてくれたら事象変異装置を
探す手伝いをしてあげる」

「必要ないといったら？」

「貴方は一生そのまま」

「俺が有機生命体と同じとでも？」

「あら、その肉体は違うのかしら？」

「人と同じで生きていられるか」

「言うねえ。でもこっちもナノマシンが使われているのよ」

「我慢比べでもしてみるか？」

「勝つのは私よ」

「冗談は止める。人間風情が俺に存在で敵うはずがない」

「ならこうしようか」

諦めた風に束は一つの提案をする。

「私が持っているエミュレーターを貴方に返すから、いつくんを殺さないでくれる？」

「……その提案には穴があるな。貴様が所持しているのは二つだ。」

うち一つを俺に戻したところで」

「開発するのにも必要だからその位は勘弁して欲しいなあ」

「干渉遮断の装置を所持している以上、外部からの干渉を受け付ける手段を有しているはずだが？」

「鋭いねえ、でも遮断するのは簡単でも直接受け取るのは難しいんだ」

「……いいだろう。貴様が僅かながらにでもまともならば、俺にエミュレーターの一つを返却した時点でまともでないという事くらいは理解しているだろう」

嘲笑するように口元をつりあがらせる少年。

それほどまでに余裕があるのだろうか。

「じゃあ、約束したね」

「ああ、した。俺は約束は守るんでな」

「神様だから？」

「愚問。神を屠る者故に」

少年がそう言うと、長方形の小さなプレートを取り出し、放り投げる。

それは少年の方へとゆっくりと落ちていき、伸ばしていた彼の手から体内へと取り込まれていった。

それと同時に今まで彼の動きを制御していたと思しき機械が、全て爆発する。

束が破壊したのか、それとも少年が破壊したのかは分からない。

ただ一つだけ言える事は、少年の力が跳ね上がったと言う事だけ。

「これだ！ こいつだ！ これこそが俺の力の一部だ！」

同時に現れたのは一機の白銀のIS。

何故この機体がこんな場所で再び現れるのか、理解に苦しむ。だが、対処しなければなるまい。

「銀の福音」シルバリオ・ゴスペルはその姿を現した。

「ほう、いい相手だ。上等とは言い難いが慣らしには丁度良い」

少年は一人そう呟くと彼自身も「ISと思わしきもの」を展開した。黒い、いや、群青色の機体。四肢を覆い隠すそれは他の機体と比べた際に酷く細い、どちらかと言えば「肉体そのもの」がISになっ
てしまったかのようにだった。それとは不釣り合いなほどに大きなバツクパツクを背負った姿は、なんともいえない滑稽さがある。

一人跳躍すると急速に銀の福音へと接近。それを感知した福音は対処を開始する。

シルバール、射撃特化型の機体に相応しく、三十六門もの数の砲撃を一度に発射する。

だが、少年が駆る機体はそんなものを意にも介さぬようにその砲撃の雨を一直線に敵機へと接近。

武装を一切していない群青色の機体は、その拳を福音へと突き出す。紙一重でそれを回避する福音は距離をとり、攻勢を強める。ひたすらに撃つ、撃つ、撃つ。

一夏達はその流れ弾を防ぐので精一杯だ。

少年はそんな程度の攻撃など涼風同然の様に、回避反応などせずに直線的に福音を追い詰める。

装甲は他よりも薄く、非常に危険なものであるのは明確だというのに、何故被弾をものともしないのか。

理解に苦しむことばかり。

拳を突き出しては回避され、また砲撃を加えるが意にも介さず、の繰り返しが続く。

まるで子供が蝶と戯れているかのような、猫が猫じゃらしにじゃれ付いているかのような、そうまるで本気を出していない。

ただひたすらに、彼は楽しんでいる。

自分の力をかみ締めるように蝶の羽をもぐような、そんな無邪気な残酷さ。

やがて飽きると、一思いに殺してしまう。

少年は今までにない加速で刹那の内に接近。そうして何らかのエネルギーを纏わせた踵落としをぶつける。

体勢が崩れた福音に、掌底を当て、下から上へ殴り上げた後に、再び掌底を浴びせ弾き飛ばし、最後に両の掌からエネルギー弾を浴びせかける。

全てを直撃した福音は地面に堕ちる。

天使が地に落ちるといふ光景のなんとこの絶望感か。

確かに一夏たちは助かったのだろう。

だというのに、与えられた感情は安心ではなく絶望という矛盾。

地面に横たわる福音はまだ動こうと首を上げる。

だがその頭部を、悪魔は踏みにじり、そして潰した。

無機質な音が響き渡り、ただのスクラップに成り果てる。

「ふむ、全快時には遠く及ばないが十分だろう」

一人少年が呟く。

ISを待機状態へと戻す。彼のISの待機状態は十字架。中心に紅い菱形の宝石が埋め込まれた、蒼い十字架。

それはどこか寂しさを誘う、そんなデザインだった。

「お前は！ 人を殺す行為に対して何も感じないのか！」

一夏は叫ぶ。

「ヒト？ これがか？」

嘲笑するように、少年は銀の福音を完全に「消滅」させる。
光を放ち、粒子となって塵芥に消える。

「これはヒトですらない。ただの機械だ。人形の天使、^{ファイオン}ヒトの作り出した虚実、グノーシスとでも言うべき存在」

「天使……アイオン？」

ぼんやりと呟く一夏。

人間だと思っていた彼は言葉を失う。

「しかし、天使とは。あれも動き始めたか。オメガ……面倒な事をしてくれたな、元凶」

「……」

沈黙を持って返答するしかない束。

「フン、まあ良い。貴様との誓約は織斑一夏という人間を殺さないこと。つまりそれ以外の人間は殺しても構わないと言う事」

少年はそういうと、セシリアたちを見回す。

「さあ、返してもらどうぞ。アニメス、俺を」

片腕に黒いエネルギーを纏わせてそう言い放つ少年。

「待て！」と一夏が声をかける。

「セシリアたちを殺すというのなら、俺は……死ぬ」

「……そういう事が。小賢しいことを考える」

「こいつらは俺の仲間だ！ 殺す事なんて許さない！」

「そうか。だが矛盾があるな。俺は殺さないということに制約した

ただだ。貴様が勝手に死ぬのならば、こちらは大喜びだ。貴様のそれは特別製。アニメスではなくアニメによって形作られている」

「意味がわかんねえ事を言ってるじゃねえ！」

そういつと一夏は零落白夜を抜くと切りかかる。

「人間、貴様を殺さずに無力化する事など造作も無いことなのだぞ？」

少年は素手でそれを受け止め、言い放つ。それは絶対の自信。

「貴様がどれほど願おうが俺は聞き届けはしない。神とは応えぬもの故な」

「五月蠅い！ お前の勝手になんてさせるものか！」

「理屈の通らぬ患者など反吐がでる。力も持たぬ非力な人間が。借物の力で自惚れるか」

「黙れ！ お前が……お前が、あいつらを殺していい理由なんて何処にもないだろ！」

「理由？ 知れたこと。母なる「神」を屠る。それが俺の理由だ」

少年がそういつた瞬間だった。

「一夏、離れる！」

ラウラの駆るシュヴァルツエア・レーゲンがその肩に装備してあったレールカノンを発射したのだ。

それに間一髪気がついた一夏は、イグニッションブーストで回避を成功させる。

「危ないだろ！ ラウラ！」

「すまない、だがこうしなければ奴に攻撃を与えることは出来ないだろう」

「良い判断だ。しかし無意味だ。人間」

やはり、とラウラが呟く。

レールカノンすら無意味とは。恐ろしい。

「貴様から殺してやろう人間。銀の髪、その眼帯はあの男を思い出す」

「先程から口ばかり動かしてないで、少しは体を動かしてはどうだ？」

よく言う、と。

言うが早いか、少年は地面を蹴りラウラに詰め寄る。

(かかった！)

ラウラはその機体の持つAICを使用し、少年の攻撃を止めた。

「ははっ、人間。足りぬ知恵でよくもこのような玩具を作り上げた。ほめようではないか」

鼻で笑う少年。

AIC、アクティブイナーシャルキャンセラー、慣性停止結界。

それはラウラの機体にある特殊能力。対象の動きを停止させる能力。

一対一では反則的な能力をはじき出す。

それを見越して挑発したに違いない。

一度だけ退く少年。

初めて退いた相手が、ラウラだった。

「そうか、そうだったな。それが使われていたな。良いだろう。その力、原初の力を教えてやるう」

もう一度少年は接近。

再び拳を突き出す。

ラウラは再びAICを使用して、少年の動きを止める。

「そう、それは無意味」

AICを突き抜けて拳をぶつける。

「な！」驚愕に声を上げて、ラウラは後退。拳はボーゲンのレールカノンを掠めた程度に終わった。

「無意味と言ったろう人間。貴様風情の力では俺に敵わないのだから」

「君は他に気を回したほうが良いよ」

銃弾を連続して撃ち込むシャルロット。

当然彼女はその程度の射撃でしとめる事が出来るとは思っていない。これは挑発だ。少年に対しての挑発。

当然のように少年はシャルロットに接近する。これが彼女の作戦だった。

距離を更にとり、射撃を加えながら後退する。

それを追いかける少年。あくまでもその足で走りながら。人間のそれとは及びつかないその速度。

「面倒な人間だ」

言いつと少年は銃をその手に具現化させる。

まるでISの武装変換のようだ。

古風なりボルバータイプの手銃を連続して放つ。その一発一発が通常のISを破壊できるほどの威力を持つ上に、何らかの属性のようなものまで付加されているらしい。

銃弾受けた場所が爆発したり、凍ったりしている。

こんな効果、聞いたことも見たこともない。

だが、遠距離に切り替えたのはシャルにとって、非常に幸運なことだった。

彼女は剣に装備を変えて接近する。

「中近特殊戦闘がメインスタイルか」

ぞくり、背筋に一つ悪寒が走る。それと同時に少年の手には刀が握られていた。

だが既にモーションを解除する事は出来ない。シャルはその剣を振り下ろす。

少年はその刀を振るい、シャルの剣を見事なまでに切り裂いてやった。その切っ先は彼女の鼻先数ミリを通過していく。

それに肝を冷やした彼女は後退して武装を銃に変えてやる。遠距離での戦闘でなければ有利となりえない、そう判断したのだ。しかし少年はそれすらも無意味という。

「貴様は実にいいセンスをしている。殺すのが惜しい人材だ。柔らかな、それでいて豪胆な戦術。一軍を率いる人間に相応しい能力だ。消耗戦を誘う実に効果的な戦術だ。尤も、それは人間相手ならばという前提があるが」

射撃戦闘においては致命傷を与える事が出来ず、近接戦闘においては此方の分が悪い。なんとやり辛い相手か。

その背後から急速に接近し、二本の刀を構える紅い影。

束の妹、箒の装備する紅椿だ。

現行する全てのISを凌駕したその機体を以ってして、姉のもたらした厄災を切り払おうとその刀を振るう。

「人間、背後からの攻撃程度で俺を殺せるとでも？ ん？ 貴様……」

当然の如く防がれたが、少年は箒の顔をまじまじと見つめる。逃げ出そうにも、刀は握られたままだ。

「貴様元凶の妹か、面白い。あのイチカという人間の代わりに、お前を嬲り殺しにするのも悪くない」

ニタア、とさながら悪魔のような笑みを浮かべる少年。それに恐怖した少女は、刀を棄てて距離をとる。

ひたすらに薄気味の悪い奴だ。

「そつら」箒が棄てた刀を振るう少年。

咄嗟に回避して、距離をとるが彼は追撃をかけ接近する。

「そらそら、もたもたしていたらその胴ごと真つ二つになってしまうぞ」

単純な剣筋、避ける事は易い。が、回避するだけが精一杯の速度。風を切る音だけが響き渡る。

「私を……舐めるなあ！」

足の展開装甲を開いて、エネルギー刃をつくりだす。そして反撃。

予想外の反撃を受けたにも関わらず、少年の表情は一つとして変化を見せることはなかった。

「面白い、本当に面白い。刀を使い、二刀流、同じ紅、エネルギーを自在に操る。本当にお前は、近い」

だから壊す、と。少年は刀を構えた。今までは鉄の棒を握っているのと変わらなかった。

だが、構えた。

それによってどれだけの違いがあるのか、同じ刃物じゃないか、なんて語るほど彼女は愚かでも愚鈍でもない。

刀は「斬る」為の武器なのだから。

汗がこめかみから顎へと滴る。

今更臆してなるものか、姉の失態は妹である自分が払わなければ。何より、一夏が見ている。

「ハアア！」彼女は一本になった刀を振るう。

その一太刀は少年に届くことは無く、彼の真横を通り抜けるだけ。

そんなことは予想されていた。特に驚くことも無く、箒は少年から放たれる斬激を刀で防御し、距離をとって再び斬りかかる。

今度は少年も動いた。大地を蹴り、直線的に、跳躍ではなく走りながら。

先に刀を振るったのは少年だった。

それを体勢を変える事によって回避した箒は少年に切っ先を向けて突きを放つ。

少年は背をそらしてそれを回避し、曲芸じみた足技で回し蹴りを当て、箒の体勢が若干崩れた間に足を地につけ、蹴り、そのまま箒へ斬りかかる。

その間にも箒の体勢はすぐに戻りその攻撃を防ぐ。

瞳をわずかに鋭くした少年はその刀を握る掌の力加減をわずかに変え、太刀筋をほんの少し変えた。

「な……」

少女は啞然とした。
刀が同じ刀によって断ち切られたのだ。

「驚くな元凶の妹。まずは腕だ」

得物を失った紅の腕を切り落とさんと、切っ先が輝く。
斬り飛ばされた腕がくるくると宙を舞い、地面に堕ちる。
嫌な血の滴る音を響かせながら。

「……ほう、人間。無駄な足掻きをするじゃないか」

二の腕から先が無くなった右腕から血を滴らせ、少年は零落白夜を構えた一夏を見る。

「流石はアニマといった所か。この俺に傷をつける所か腕ごと持っていくとはな」

斬り飛ばされたのは少年の右腕だった。
それですら、余裕の表情を変えない。
苦痛に顔を歪ませる事すらない少年はまさに人間とはいえない。生命の危機すら感じてないのではないか。

「俺を殺せないなら……！俺がお前を……！」

「はは、殺した事も無い割りに良い口上だ」

少年はそういう。

だが、腕が一本無くなったということとはそれだけの戦闘能力を低下を意味する。

「ああ、それと腕は」

斬り飛ばされた腕が浮き上がり、少年の目の前へ。

「別にどうでも良い」

それを左手で掴みとり、切断部を接合させる。
再生能力まであるなんて信じられない。

だが、退けなければ駆逐されるのみ。

一夏は零落白夜は構える。

エネルギーソードを彼は構えて少年と対峙する。

左腕の盾、右手の剣。

そして少年がその手に握るのは一本の刀。

鞘に収まったままの刀が一本、握られている。

先程の刀とは異なるそれを構える少年。

居合いの構えだろうか？ それにしては柄に手をかけてないところを見ると、それですらない。

一体何の構えだろうか。抜刀されてすらなければ、腰だめにすら構えてない。

にらみ合う二人の間に水を差す銃弾。

それは少年を狙ったものだった。

「……邪魔だな」

教師の一人が放ったそれはあまりに正確。

少年が刀を使って防ぎながらの後退となるが、それはあくまでも一夏に流れ弾を発生させない為の配慮に過ぎない。

「人間、手を出した事を後悔するんだな」

跳躍して急接近。向かってくる銃弾は全て刀で防御して接近する。そして抜刀。白銀に煌く刀が、女性教諭の首筋に迫る。

「……！ エレハイム……ッ！」

その刃を止め、距離をとる。

殺すのを躊躇った。あの少年が、殺すのを躊躇ったのだ。

「なぜエレハイム、君がッ……！ いや、ありえるのか……？ 彼女は……」

「私はソフィアだ！」

「ちい！ エリイ！」

動きが明らかに鈍っている。

刀から素手に攻撃パターンを変更する。

空中での制動をバーニアなしで行い、攻撃を行う。

銃弾を滑らかな動きで回避し、銃を弾き飛ばし、掌底を腹部に入れてやる。距離をとった彼女に対してとび蹴りを放ち地面にたたき落とした。

「……」 気を失った女性教師を見て、少年は沈んだ表情をする。

「気が変わった。俺もこの学園に入らせてもらおう」

少年は短く、そういった。

そう、それが、彼の、彼らの、異質な物語の始まりだった

訪れる異質。(後書き)

因みにISは四巻までの話しか知らないものであしからず。

一夏の性格が違ってねえ。

あれだし。

物凄い理解できないし。

一夏ほぼ無視で話し進めます。

生徒会長なんていなかったのさ。

因みにイド状態に近いです。

アニメスのお話は適当につじつま合わせに作りました。

可能性事象の範疇でしょ。

因みに先生大好きなんで、刀だけはやたら出ます。

サーガも先生だけは常にメンバーに入れてたので。

まあ、暇だったら付き合ってくださいいな。

所詮戯言に過ぎませんし。

感想は随時募集中です。

中傷だけはお断りですけどね。

歪な転校生。(前書き)

説明っぽいが続きます。

一応転校生と言う事なので、各キャラクターに質問させてみました。因みにケータイ小説用では無いので、PCから見ることをオススメします。

空白開けてないのはその所為なんで。

歪な転校生。

「えー……今日は、皆さんに転校生の紹介をしたいと……」

疲れたような、最早呆れ果てたような、恐れているかのような、そんな表情をする副担任の山田先生。

クラスの生徒諸君も一様に引き締まった表情をしている。

緊張とは異なる。一様に警戒しているのだ。

転校生、と聞くとこの間のあの襲撃者のこと以外に考えられない。

人間を超えた、いや人間とは異なる力を持った少年に皆恐怖しているといっても良い。

扉が開き、制服に身を包んだ少年が姿を現す。

彼はゆっくりと教卓の横まで歩み寄る。

「アベル、アベル・イド」

彼は短くそういっただけだった。

アベル・イド。それが自分たちの命を狙う男の名前。そしてこれからの生活を共に行う一人となる。

敵と一つ屋根の下にいるなんて、耐え難い緊張だ。潜入任務などですらないのに。

「えー……皆さんご存知かと思いますが……」

「必要ない、人間。どの道、しばしの間のみ。いずれは貴様らの持つ玩具も回収させてもらう」

彼はそう言いながら見下した瞳でクラスメイトたちを見回す。

まるで人間を見ている様ですらない。

物を見ているかのよう。

「こういった場では転校生に質問をするらしいが、貴様らはこの俺に質問などないのか？」

形式ばった言い方。

「ああ、気にするな。今は、未だ」

殺さない、とでも言うのだろうか。

確かに、約束は守った。一夏を殺しはしなかった。

恐る恐る一人の生徒が声を出す。

「あ、貴方の持っている機体の名前は……？」

「良い質問だ。ウーニウエル、ウーニウエルシタース」

ウーニウエルシタース。

その場にいた生徒達はイマイチぴんと来ない風だったが、代表候補生は僅かながら気がついたようなそぶりを見せる。

「随分と大仰な名前だな」

「分不相応とでも言いたいのか？ 銀髪」

「ああ、貴様には相応しくもない名前だ。神のつもりか」

「神を屠る者として、相応しい名前だとは思わんか。小娘」

「神などいるわけがない。もしいたとしても貴様がそれを語ることになるのだろうか？」

「つまらないことを言うな。神は存在する。そして俺は奴に取り込まれる気はない」

神を本当に信じている人間が、この日本と言う国のこの教室の中にどれほどいるのだろうか？

現実が存在し、この世界に具現化していると信じているのはおそらく目の前の少年ただ一人だろう。

「奴、とは誰のことですか?」

物怖じせずにセシリアが質問する。

「神、貴様らが崇め畏れるモノ」

それにアベルは短く返答する。まるで苦虫を噛み潰したかのように顔をしかめて。

「神なんて抽象的な」

「人間は自分の過去を容易に消し去れる。他の生物の過去を知るは易くとも、自らの過去を知る事は難しい」

「どういう意味ですか?」

「知れたこと。貴様ら人間が生み出したものだ。デウスは」

鼻で笑ってそういうアベル。

人間が生み出した神? それは確かに人間が心の拠り所や、不可解な現象に対して理由をつける為に、神は存在するといっても良いだろう。

だがこいつが言っているデウスとやらは、おそらく現実に存在する。

「……そうか、^{リミッター} 刻印か。都合の良いものだな」

一人何を呟くか。

刻印だの、デウスだの意味がわからない。

「……お前は、俺たちを殺すつもりなのか?」

一夏がにらみつけて、そう尋ねた。

「殺す、そうだな。確かに殺す。そうでなければ俺を取り戻せないからな」

「お前を取り戻す？　どういう意味だ」

「貴様らの機体に使われているアニムス。そいつは俺の一部分だ」

アニムス、魂を意味するもの。

だとすれば、今の彼は不完全な状態と言うことになる。

感情はあるが、何らかの部分が欠如しているとも考えられる。

「尤も、貴様の機体に使われているそれだけは特別だがな」

一夏を睨み付けながら、アベルはさういう。

だからこそあれほどまでに一夏を執拗に狙い続けたのか。

彼の所有する白式に使われているものが特別なものであるから。

もしかしたらそれが男性である一夏がISを使っている理由なのかもしれない。

だが、機体に使われているというだけでは漠然としている。それぞれの機体は別個の部品で構築されている。

量産型　コアの生産が限定されている以上量産型と呼ぶのはどうかと思うが　は多くのパーツを共有しているが。

それ以外で全てのISに共通している物といえば、それはコアだけだ。

おそらくはそうなのだろう。

「俺だけ特別って、どうということだよ」

「言っただけだ。貴様とあれの相性がそれほど良い上に、元凶が加工を施しているからな。他の人間には起動が出来ないように」

いる」

「あれとはなんだ！ 一体何が特別なんだ！」

「一々五月蠅いぞ。アニメが使われているのだ」

「アニメ？ なんだそれ」

「面倒だ。説明は割愛させてもらう。ISの最も重要な機関だ、と
いっておこう」

それだけ言つと口をつぐんだ。

別に言いたくない、というよりも本当に面倒なだけのようだった。

「アニメスやアニメとは一体何の事だ」

最も気になるところを箒が質問をする。

「貴様らが使っているISとやらの自己進化能力、機体との同調率
を高めるために必要なものだ。実質これが無ければ貴様らの機体は
唯の鉄屑同然だがな」

「つまり、私たちのコアに使われているものだ」と

「知らん。が、最も重要なものだ。そういつた部分に組み込まれて
いる可能性はある」

「自己進化能力を高めるためには言いますが一体何故……」

「簡単だ。貴様等の機体にはそれぞれ意思があるからな。そのため
に必要なのだから」

成程。単純な自己進化プログラムではないと思っていたがそんなか
らくりがあったとは。

「先程の戦闘を見る限り、貴様も特別に見えるがな」

いまいち曖昧なのだ。と続ける。

何が曖昧なのか気になるが、これを聞きたくはない。
第と一夏の機体は第四世代の技術で作られているのだから。
どんなブラックテクノロジーが詰め込まれているのやら……想像し
ただけで背筋が凍る。

「さて、質問もそろそろいいだろう。これ以上は授業とやらに支障
をきたしそうなのでな」

さらりと時間を気にした風に言う。実際、もうそろそろ時間だった。

「そ、それではアベル君はあいている後ろの席へ」

山田先生の指示で、アベルはあいている席へ移動をする。

移動するだけで全員の視線と注意が集中していく。

結局何事も起こることは無く、一人静かに席に座る。素手でISを
圧倒する人間が自分の背後にいるという事を考えるとどうも落ち着
かない。

たとえ殺さないと解っていても。

歪な転校生。(後書き)

えー、玩具という台詞はゼボイム文明のときに現れたイドの台詞です。

ヴェルツールカッコイイヨ。

因みにウーニウェルシターズはドイツ語に訳してヴェルツール。英語に訳すとワールドオール。

日本語に訳すと事象世界、全宇宙だとかになるそうなの。ワールドツリーとかにたような訳し方だね。

専門用語満載で行くので、質問あったら答えるよ。

といっても、なるうの仕様がよくわかってないけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2545y/>

IS ~ XENO ~

2011年11月17日03時23分発行